慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	チュルゴオ 価値と貨幣
Sub Title	
Author	山内, 毅
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1938
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.32, No.2 (1938. 2) ,p.253(101)- 273(121)
JaLC DOI	10.14991/001.19380201-0101
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19380201-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

行爲に變じて行つたものと認められる。今日アラビヤ其他に殘つてゐる隊商の風習は之から來たものである。此隊商は既に西紀前二千年前の記錄に現はれ、その時代のバビロンのハムラビ大王の法典にも明かに之に關する法文が制定されて居り、旅商の不慮の災禍、又は損失に對する保護政策なども採つてゐる。

バビロンに於ける商人の原稱ダムカルムといふ語が元來アッカド人の語で大牧羊者の事であるが、之が商業的中介者の意となり、後には高利貸、銀行類似業者の意味となつた。此語の歷史的變化が其任務の發祥と其進展を示してゐる。

而して、此商人等が富の蓄積をなしてから之を農民に貸與した。即ち農民から收穫物を買入れるに際して、其價格を壟斷して此地位を得たものである。此現象は西紀前二十二三世紀までに頻繁に起り、西紀前二〇〇〇年のバビロン時代には中堅社會層の內面にまで喰ひ入つたから、遂にハムラビ法典の取締的法令となつて現はれたのである。（井上稿、昭和十一年一月法學研究所載「ハムラビ法典の階級性」參照）

巽に本論にも記述した通り、第一次農民窮乏、土地分散は西紀前二六五〇年頃のラガシ王朝末期に記錄されたが、之は神官等の橫暴に原因した。次の西紀前二千三四百年代のウル王朝では商人層が文獻の上に現はれ、土地から離散した庶民を奴隸として賣買してゐる。此場合、奴隸として賣られた人々の前所有地（所屬地）は殆んど商人の手に歸した。當時既に商人といふ原語ダムカルムは富者、高利貸と同義語であつたのである。だから、それに次ぐ西紀前二〇〇〇年のハムラビ法典時代には此高利貸の惡辣を取締る必要が出て來たのである。本論には、それ々々の時代を代表する文獻を出した。之は勿論其文獻の單なる一部に過ぎないが、此間の消息を語つてゐる事は勿論である。

（完）

チュルゴオ「價値と貨幣」

山內　毅

はしがき

左の一文はチュルゴオの遺稿 Valeurs et Monnaies の邦譯である。この「價値と貨幣」はチュルゴオの思想の轉機を示す重要な勞作であると共に、心理主義價値學說史上に逸することの出來ない貴重な文獻である。尙ほこの論文の想源については、手塚教授「心理的經濟價値說の歷史的研究の一節」（福田博士追憶論文集所載）を參照せられ度い。山內君いま病床に在り代つて私がこのはしがきを添へた（永田淸）。

貨幣はそれが恣意的であり慣習的であると云ふ點で、各種の國民間に異るが、若干の點に於いてその諸關係により共通の名辭或は本位に結びつけられると云ふ點では、全く一種の言語である。この點で貨幣はあらゆる種類の尺度に共通なものをもつてゐる。

あらゆる言語を結び付け、これにより使用される音は多樣であるに拘らず、不變類似の內容を全言語に付與する共通の名辭は、語の表明する理念それ自體即ち音により人間の精神に表現せらるゝ自然物と此等の物の種々なる表面を識別し、之を千態萬樣に組み合せて人間が心に懷く觀念とに外ならぬ。

あらゆる慣習から獨立して、各言語に共通且つ本質的な此の基礎が吾人をして各言語即ち用ひられてゐる慣習の各體系を理念の表號と看做すを得せしめ、かくてこれ以外のあらゆる慣習の體系を之に比較せしめる。是は恰も各言語で解釋され得る、即ち一言で云へば、飜譯され得る理念の體系そのものに、慣習の諸體系を比較すると同樣である。

延長面積容積の全尺度の共通の名辭は「擴がり」そのものに外ならぬ。これに就いて種々なる國民の內で用ひられる種々なる尺度は、恣意的な區分に過ぎずして、その相互を比較し、又相互に換算し得る。

諸言語は相互に飜譯され得る。諸尺度は相互に換算し得る。此等の異れる方程式は全く異れる二つの計算を示してゐる。

言語は其自體では之等の理念に無關係なる音によつて理念を指示する。一つの言語と他の言語とでは之等の音は、全く異り、之を說明するには、一つの音に代ふるに他の音を以つてしなければならぬ。即ち外國語の音に代ふるには「擴がり」を測定し得ぬ。單位としてと採るに同意せる「擴がり」の量の選擇と種々な分量を知らしむるために採られた區分の選擇は恣意的可變的である外はない。故に一物より他物へ代ふ可き代用は決して存せぬ。唯だ比較す可き諸量と他の比較に代用す可き比較が存するのみである。

各國の「貨幣」が比較される共通の名辭は、それが測定すべく用ひらるゝ商業の全對象たる「價値」そのものである。然し此の價値はそれが相應ずる貨幣の量そのものによつてのみ指示され得るが故に、その結果、一の貨幣は他の貨幣でのみ評價され得る。之は一の言語の音が他の音によつてのみ解釋され得ると同樣である。

全文明國の貨幣は同一の素材で造られ、素材の區別と單位として看做されるものゝ恣意的な決定以外には之等の間に差がないから、貨幣は此の見地の下で各國間に於ける慣用の尺度の如く相互に換算され得る。

次いで此の換算は貨幣の秤量と稱號の表示により非常に便利な態樣でなされることが解るであらう。

然し秤量及び稱號の表示により貨幣をかく評價する方法は、貨幣に關する商業用語を理解せしむるに充分でない。歐洲の全國民は二種の貨幣を認めてゐる。金屬貨幣で確實な刻印を記され、この名稱の下に流通するエキュー、ルイ、クラウン、ギニーの如き「現實貨幣」の外に、その各〻は一種の「擬制貨幣」となつた。之はコント及びニュメレール と呼ばれ、その名稱及び區分は現實貨幣の如何なる片にも相應せずして、現實貨幣が結びつけらるゝ共通の尺度を形成し、それに應ずる一定數の尺度の諸部分によつて現實貨幣を評價する。佛國に於いてコント又はニュメレールのリーヴルは此の如きもので、其は二拾スウーより成り、その各〻は更に十二ドゥニエに分たれる。一リーヴルに相應すべき一片の貨幣も存せぬ。此の二つの現實貨幣を計算貨幣で表明することはエキューとルイとの關係を一に對する八として定める。

是等の計算貨幣は周知の如く恣意的な單純な名稱に過ぎないから、國毎に變化し、同一國內でも時代毎に變化し得る。

英國人も亦ポンド・スターリングを有して居り、二拾スウ即ちシリングに分たれ、其は又更に拾二ドゥニエ即ちペンスに分たれる。オランダ人はフローリンによつて計算し、その分割は吾々のリーヴルのそれと相應して居らぬ。

故に「商業地理學」に於いて各國の現實貨幣と秤量及び名稱による評價のみならず、各國で使用される計算貨幣、計算貨幣と國內で流通する現實貨幣との關係及び種々な國家の計算貨幣が相互に有する關係を吾人は知らねばならぬ。

計算貨幣と各國の現實貨幣との關係は現實貨幣の價値を同國の計算貨幣で表明することにより決定される。例へ

ばデュカをフローリンで、ギニーをシリングとドゥニエ・スターリンで、ルイとエキューをリーヴル・トゥルノワで表すが如きである。

種々なる國家内で使用される計算貨幣が相互間で有する關係に關して先づ現れる觀念は、各國の計算貨幣の現實貨幣に於ける關係の歸結と現實貨幣の秤量及び稱呼との認識とに就いてゞある。實際に英國のクラウンの秤量及び名稱と佛國のエキューの秤量及び名稱とを認識するならば、クラウンの佛國のエキューに於ける關係が知られるであらうし、又エキューがドゥニエ・トゥルノワの幾許に値するかを知れば、之よりクラッンがドウニエ・トゥルノワの幾許に値するかゞ推論される。又クラウンが幾許のドゥニエ・スターリングに値するかゞ知られる時は、若干量のドゥニエ・スターリングが若干量のドゥニエ・トゥルノワに等しいことが知られ、ルーヴル・スターリングとルーヴル・トゥルノワとの關係が判明する。

種々なる國の計算貨幣を之と各國の現實貨幣とを比較することにより、又後者の秤量と秤稱とを知ることにより評價する此の方法は、若し單一の金屬貨幣、例へば金貨しか存せぬならば、或は此の用途に使はれる諸金屬、例へば金と銀との相對價値が商業國間で同一であるならば、即ち純金若干量、例へば一マルクが嚴密に各國間で同一なる純銀一定グレインに値するならば、何等の困難も蒙らぬであらう。然し金及び銀の相對價値は種々なる國家内に於ける二金屬の相對的な豐潤又は稀少に從つて變化する。

若し一國内で銀が金より十三倍存し、從つて一マルクの金を得るために、十三マルクの銀が與へられるならば、銀が金より十四倍在るやうな他の國では、一マルクの金に對して十四マルクの銀が與へられるであらう。その結果、金と銀とが同一の相對價値を有せざる二國の計算貨幣の價値を決定するために、例へばリーヴル・スターリングをリーヴル・トゥルノワで評價するために、比較の名辭として金貨が使はれるならば、銀貨を利用した時と同一の結果とはならぬであらう。眞の評價が此の二結果の間に存することは明かであるが、然し之を完全嚴密な正確さを以つて決定するためには、此の問題の解決に非常に微妙な一聯の考慮をめぐらさねばならぬ。然し國毎の貨幣の取引、此の取引に關する談判總で、信用貨幣による貨幣の代表、爲替の操作、銀行業等は此の問題を解決したるものと想定してゐる。

「貨幣」なる語はその固有本源且つ原始的な意味に於いてラテン語の Moneta に嚴密に相當し、公的權力が之に捺印せしめた刻印によつて決定され保證せられる秤量と稱號とを有する金屬小片を意味する。此の名稱を持ち來り、刻印を指示し、この重さをマルクの重量に歸せしめるにより、各種の國の各貨幣の秤量及び名稱を明にすることは、最初の觀點の下に考察せられた貨幣に就いて、明瞭な觀念を與へるために爲す可き總てのことである。

然し慣習は貨幣なる語により抽象的なより廣汎な意味を與へた。金屬は一定の重量の小片に分割される。そして之が商業で便利確實な態樣で使用され得るために、又商業に於いて諸價値の尺度と同時に又諸商品の代表的擔保として役立つ爲めにのみ、公權は刻印によつてその名稱を保證する。猶ほ更に既に此等の金屬が全價値の尺度として又共通の擔保として役立つでゐたが故にのみ、斯く貨幣を分割し、之に刻印を附し、一言で云へば、之を貨幣たらしめんとする考を起したのである。

貨幣は他の職能を持たぬから、その名は此の職能そのものを指示するものと看做された。而して貨幣は諸價値の尺度であり擔保であると云ふのは正しいから、又諸價値の尺度であり擔保たるものは總て貨幣に代位し得るが故に、廣義で貨幣なる名稱がかゝる用途に使はれる物全部に與へられた。此の意味でマルディブ島に於て貝殼が貨幣であ

り、動物がゲルマン人及びラテンの昔の住民の貨幣であり、金銀銅が文明人の貨幣であつたし、又此等の金屬は之等の秤量と名稱とを立法的刻印で指示することを想ひつかぬ以前に既に貨幣であつたと云はれるのである。此の意味でこそ、貨幣を代表する信用證券に紙幣の名稱が與へられる。最後に此の意味でこそ、貨幣と云ふ名稱はあらゆる價値及び現實貨幣の諸價値そのものを相互に比較するに役立つ純粋に抽象的な名稱と一致し、又計算貨幣、銀行券等々の言葉が用ひられるのである。

貨幣なる語は此の意味でラテン語の Moneta なる語に飜譯さる可きでなく、此の語に最もふさわしい pecunia なる語を以つてす可きである。

此の最後の意味でこそ、又諸價値の尺度諸商品の擔保としてこそ、吾人は商業への貨幣導入の經過及び諸價値測定の技術が人間の内部で行へる進歩に從ひつゝ貨幣を觀察せんとしてゐるのである。

價値なる此の語で此處で何を意味す可きかに就き明瞭な觀念を得ることが必要である。

ラテン語で Valere 即ち「値する」と云ふ動詞に相當する抽象名詞は慣用の語法では、區別することの重要な數個の意味をもつてゐる。

ラテン語で此の語がもつてゐた本源的意味は力であつた。Valere は又「達者でゐる」ことを意味してゐたし、今猶ほ佛語で Valide, Invalide, Convalescense などの傳來語の内に本源の意味を保持してゐる。價値なる語が力を意味してゐる點より出發して、その意味を轉じて之に軍事上の勇氣即ち體力を意味してゐた同一の語で殆ど常に古代人が示してゐた勝味を意味せしめた。

Valoir なる語は佛語で非常に使ひ慣れてゐるも一つの意味を有してをり、之は此の語及び價値なる語に商業上で與へられる意味とは如何に異つてゐても、而もその第一の基礎をなしてゐるものである。

Valoir なる語は自然の賦與物及び財を吾人の享樂吾人の欲望の滿足に適合せるものとして看做さしむる吾人の欲望に相關せる適良性を表明する。シチゥが、不味い時何も値せぬとか、或食物は他の食物よりも健康にとつて價値はないとか、或る織物は他の織物よりより價値があるなど云はれる。かゝる言葉は「商業上の價値」とは無關係で、單にそれが向けられる用途により適合せることを意味するに過ぎぬ。

悪い、中位の、良い、優良なといふやうな形容詞は此の種の「價値」の種々なる程度を特色づける。然し「價値」なる名詞は此の意味では Valoir なる動詞程用ひられてゐないのに注意すべきである。然し若しそれが使用されるならば、それは吾人の享樂に關係しての適良性以外の意味ではない。此の適良性は常に吾人に相關的なものではあるが、猶ほ價値なる語が用ひらるゝには、その物に現實固有な而も吾人の使用に適合せしめる性質が存在する。

價値なる語のかゝる意味は他人と交通すること無き孤立人にとつても起るであらう。

吾人は唯一の物にのみ自己の能力を行使する孤立人を考察するであらう。彼れは之を追求するか、避けるか或は無關心に捨て置くかであらう。最初の場合には、彼れは疑もなく此の物を追求せんとする動機を有し、之を自己の享樂に適合せるものと判斷してゐる。彼れは之を「適良」なりと感じ、此の相關的適良性は絶對的に「價値」と呼ばれ得るであらう。然し此の價値は他の價値と比較されて居らぬから測定され得ないであらう。そこで此の物は「價値を有してゐる」が、少しも「評價」されてはゐない。

若し同一人がその使用に適合せる數個の物の間に選擇が出來るならば、一を他よりも選び、栗よりもオレンヂをより旨く感じ、防寒には、綿布よりも毛皮が優れたるを感ずるであらう。彼れは之等の中孰れかゞ他より「價値あり」と判斷し、心中でその價値を比較し評價するであらう。その結果選擇せるものに專心して、他を捨て去る可く決

心するであらう。

野蠻人が犢を殺して之を小屋へ搬ぶとする。その途上で小鹿を發見し、之を殺し、より美味な肉を食はんとして犢に代ふるに小鹿を以つてする。斯くの如き事情でこそ、子供は先づ栗でそのポケットを充たし、後に之を空にして自分に與へられたボンボンを入れる余地を作る。

斯くてここに野蠻人及び子供の判斷の中に各種の物の價値の比較即ち評價が見られる。然し「之等の評價」は何等一定せる物を有せず、その人の欲望が變化するに從つて瞬間毎に變化する。野蠻人が飢を感ずる時は、一片の肉を最上の熊の毛皮より尊重するであらうが、飢が充され寒さを感ずる時には、熊の毛皮の方が彼れに貴重となるであらう。

最も屢々野蠻人は現在の欲望滿足のみにその願望を限定し、自分の使用し得る物の量が如何うあつても、必要なるものを得てしまつてからは、殘部を捨て去る。これは彼れに何の役にも立たぬからである。

然し經驗は此の野蠻人にその享樂に適合せる物の内若干時の保存に堪え得る性質を有し、且つ將來の欲望滿足のために蓄積し得るものが若干あることを敎へる。之等は瞬間の欲望が充足されても、その價値を保持する。彼れは之等を所有せんとする。即ち之等を匿し又は擁護し得る確實な場所に納めんとする。專ら享樂し或は願望する人間に「相關的な」此の價値評價に參加する諸考慮は、豫見が欲望の最初の感覺に附け加へた新しい見地により增加する。

初め瞬間的に過ぎなかつた此の感覺が永續的性質をとる時、その時こそ、人は欲望間に比較を行ひ、單に現在の欲望の急速な衝動ではなく、諸種の欲望の必要と効用との秩序に基いて諸物の探求を割り當て始める。

緊切度の大小による効用秩序が、平衡或は修正せられる他の諸考慮に關して最初に現れるもの〻一つは、物の卓越性即ちこれを求めしめる種類の願望を充足するに存する大小の能性是である。

卓越性の秩序はその結果たる評價に關して効用秩序に些か歸することを認めねばならぬ。蓋し此の卓越度が生ずるより強烈な享樂の快味はそれ自身、物――卓越せるもの一個よりも、豐富ならんことを撰ぶのであるが――のより緊切な必要と比較される長所である。

第三の考慮は願望の對象を取得するに要すと考へらるゝ困難の大小である。蓋し等しき効用と等しき卓越度とを有する二物間に於て、再取得するに多くの苦痛を要し、又之を取得するに實により多くの心勞と努力とを要する物が彼れに全くより貴重に思はれるであらうのは當然である。此の理由によつてこそ、水は必要且つ多くの快味を味はしむるに拘らず、その所有の確保を欲せざる程に水に惠れた國では、貴重なものとは看做されぬ。何故ならば、此の物の豐潤なることが彼れをして自由に得しめるからである。

以上の所論に於いては未だ交換を導入してゐないが、そこには既に評價の一要素たる稀少性が存する。然し猶ほ此の稀少性に附與せられる評定は特殊の効用に基づくと云はねばならぬ。蓋し獲得に困難なる物を豫め保持するのがより効用大であるからこそ、人は之をより求め、且つ之が取得により多くの努力を拂ふのである。

孤立人に相關的な此の種の價値決定に參加する考慮は三個に還元され得る。之が協力して價値を決定する三要素である。此の價値を適當な名によつて指示せしめるために「尊重價値」と呼ばう。斯く云ふのは其が事實上全く正確に願望の種々なる對象に人間の附與する尊重度であるから。

此の概念に據つて人間が願望の種々なる對象に與へる尊重度は如何なるものか、此の評價の本質は何か、特に各對象の諸價値を比較する單位名辭は何か、此の比較尺度の計算は何か、その單位は何か等々を分析しても無益である。

之等を熟慮しつゝ吾々は人間の生存と快適とに必要なる對象の總體が、云はゞその廣汎且つ多樣なるに拘らず、

充分に限定せられた「欲望總額」を形成するのを見るであらう。

彼れは此の欲望滿足を取得するために猶ほより限定された體力或は智力のみを有する。彼れの享樂の個々の對象は彼れに注意疲勞勞働及び少くとも時間を費さしめる。各對象物の探求に向けられた能力の使用こそが享樂の代償云はゞ對象の「價格」をなすものである。人間は猶ほ一人である。自然のみが彼れの欲望を充足し、而して既に彼れは自然と最初の「商業」を行つてゐる。自然は此の商業で人間が勞働により、能力と時間とを使用するのでなければ何物をも提供しない。

かくて彼れの資本は狹隘な限界内に限られてゐる。彼れは自己の享樂總額を資本に割り當てねばならぬ。自然の大倉庫で選擇を行ひ、自己に具合良き諸種の對象間に自由に處分し得る「價格」を割り當てねばならぬし、その生存と快適とに對する重要性によつて之等を「評價」せねばならぬ。而して此の評價はその苦痛及び時間の部分或は二者を、一言で云へば重要性が等しいか或は又それ以上の物の探求を、之がために犧牲にすることなくして評價された對象の探求に使ひ得る能力部分に就いて、自分の心内で行へる決算に外ならないではないか。

ここで然らば諸價値の尺度は何か。彼れの比較の尺度は何であるか。明かに能力以外には尺度もない。彼れの能力の總量が此の尺度の唯一の單位であり、彼れの出發し得る唯一の定點であり、而も各對象に附與する尊重價値は此の尺度中の幾つかの比例部分である。從つて孤立人にとつて對象物の「尊重價値」はその能力總量中此の對象に就いて有する願望に應ずる能力部分、或は此の願望を充足するために使用せんとする能力總量中の一部分であると云ふことになる。換言すれば尊重價値は比例部分の全能力に對する比例で、之は分數で表現され、分子として單位を有し、分母として價値の數即ち人間の總能力が包含する等しき比例部分の數を有するであらう。

此處で吾々は一の反省を拒むことが出來ぬ。吾々はまだ商業が生起するのを觀なかつた。即ち未だ二人を集合せしめずして、吾々の研究の第一歩から價値の一般理論が含む最深且つ最も核心的な眞理の一に觸れてゐる。此の眞理はアベガリアニが二十年以前にその論文 della Moneta で、簡單ではあるが非常に明快雄勁に表明した所である。乃ち言ふ。――「全價値の尺度は人間である」と。此の同一の眞理に就いての「富及び租稅に關する分析論」の題名の下に、最近現れた著書の作者による瞥見は、混亂してはゐるが恒常且つ單一なる價値に就いての理論を誕生せしめた如く思はれる。之は常に單位により表現せられ、その個々の價値總ては比例部分に過ぎぬとされ、之は彼れの心中に眞理と誤謬が混同せる理論で、之がために大多數の讀者には可なり曖昧に思はれた。

こゝでは以上の簡單な敍述では讀者が持つかも知れぬ曖昧な點を詳述する餘裕はない。――尤もこの說明はその重要性に比して廣く論ぜらるべき價値あることであるが。況や此の場合之より多くの結論を詳述す可きではない。

今まで吾々を導き來つた推理の糸を辿り續け、最初の想定を擴張しよう。孤立人のみを考察する代りに、その二人を集合せしめよう。即ち各自が夫々の用途に適合せる物を所有するが、之等は相異り、又異る欲望に適當してゐるとする。例へば温帶の海の中の無人島で二野蠻人が各自その側に接し消費し得る以上の魚を舟に携へ、他は身を纏ひテントを作るに使用し得る以上に毛皮を持つてゐるとする。魚を持つて來た者が寒氣を、毛皮を持つて來た者が飢餓を感じたならば、後者は魚の所有者にその貯への一部を求め、その代りに若干の毛皮を彼れに與へんと申出で、他が之を承諾することになるであらう。そこに交換が起り、商業が行はれる。

此の交換内で起る事象を少しく考察してみよう。魚を腐らぬ範圍の數月間食べるだけ釣り取つて後は之を無用として捨て去つた者も、此の魚が（交換を通じて）着るに必要な毛皮を取得せしむるに役立ち得ることを知る時、之を

尊重し初める。過剰であつた魚は、彼れにとつて今まで持つてゐなかつた價値を持つて現れる。毛皮の所有者も同樣に考へ、彼れの側では、自分自身の欲望をもたぬものを「評價」するやうになるであらう。二人が各自所有する物を過剰に備へ、過剰物に何等の價格を附さぬに慣れてゐると想定したる最初の場合では、交換の條件に就いての競合は恐らくは餘り激烈ではないであらう。各自は他の者に自ら欲望をもたぬ魚全部又は毛皮全部を取るに委ねるであらう。

然し少し想定を變化しよう。即ち二人の各々に過剰物を保持するの利益、之に價値を附する動機を與へよう。一人は魚の代りに非常に長く保持に堪える玉蜀黍を持來り、他は毛皮の代りに薪を持來り、且つその島は穀物をも薪をも生産せぬと想定しよう。我が野蠻人の各自が數月間の食料又は燃料を有し、彼等は恐らくは兇暴な動物又は敵國民の恐怖により追出された大陸に戻ることによつてのみその貯を更新し得る。彼等は海上で暴風雨期に避け難い危險に身を曝すことによつてのみかくなし得る。玆に玉蜀黍の總量と薪の總量とは、二所有者にとつて非常に貴重なものとなり、それらが彼等にとり大なる價値を有することは明かである。然し一ケ月内で消費されるであらう薪は、若し此の期間に玉蜀黍の缺乏のためその所有者が飢死するならば全く無用となるであらうし、玉蜀黍の所有者が薪の缺乏のために凍死に曝されるならば、此の者も前者以上に長生きできぬであらう。故に彼等は交換を行ふ外ないであらう。その結果、各自は海に出で大陸に再び玉蜀黍と薪とを求めに行き得る季節の來るまで薪と玉蜀黍とを持ち得る。かゝる狀態では、兩者は疑もなく前程鷹揚ではなくなるであらう。各自は自己のもたぬ一定量の物品を自らの持つ一定量の物品より選ばしめる諸考慮の總てを綿密に計量するであらう。即ち彼れは二欲望の力、兩者間に彼れが均衡を保つ二利益即ち玉蜀黍を保持する利益と薪を取得する利益、玉蜀黍を取得する利益とを計量するであらう。一言にして云へば、その物件の尊重價値を極めて正確に自分自身に關聯して決定するであらう。此の「尊重價値」は二物を取得するに就いて有する利益に比例して居り、此の兩價値の比較は明瞭に兩利益の比較に外ならぬ。而も各自は夫々の側で此の計量を行ひ、その結果は、相異るかも知れぬ。一人は六ブラスの薪に對して三ムジュールの玉蜀黍を交換するであらうし、他は九ムジュールの玉蜀黍に對して六ブラスの薪しか與へぬであらう。彼等の各自が保持することに就いて有する利益と、取得することに就いて有する利益とを比較する此の種の心的評價とは關係なく、兩者は共に猶ほあらゆる比較から獨立して一般的な利益に動かされる。今まで持つ物品は可及的多くを保持し、他人の物品は可及的多くを取得せんとする利益が即ち之である。かゝる見地に於て、各自は二つの利益即ち交換す可き二物件に附與する二つの價値に就いて、心中に於て爲したる比較を祕密に守り、より少く提供し、より多く要求することにより、自己の欲する物件の所有者の胸中を探ぐるであらう。後者も亦後者で、同一の振舞ひをして交換條件に就いて競合し、兩者共が合致す可き大なる利益を得たる時遂に合致する。兩者は徐々にその提供を增加し、或は要求を減少するであらう。その結果、遂に一定量の薪に對して一定量の玉蜀黍を與へることを同意するに至る。交換の行はれる瞬間に於いて、例へば五ブラスの薪に對して四ムジュールの玉蜀黍を與へる者は、疑もなく五ブラスの薪より四ムジュールの玉蜀黍を偏重し、之に優越せる「尊重價値」を與へてゐる。然るに今度四ムジュールの玉蜀黍を受ける者は之を五ブラスの薪より偏重してゐる。一物を讓渡することにより取得した物に取得者が附與する「尊重價値」の優越性は交換に本質的なものである。蓋し之は交換の唯一の動機だからである。各自が若し交換することに利益或は「個人的利潤」profit personal を見出さぬならば、自分自身に關聯して受取りたる物を提供したる以上に高く評價してゐないならば、現狀のまゝに止るであらう。

然し此の「尊重價値」の差は相互的で、その双方に於いて正確に相等しい。蓋し若しそれが等しくなかつたならば、兩者の一人は他の者程交換を欲せず、他をしてより多く提供せしめて自己の價格に近づくを餘儀なくせしめるであらう。此の故に各自は「等價値」を受くるに對して「等價値」を與へると云ふのは常に嚴密に正しい。五ブラスの薪に對して四ムジュールの玉蜀黍が與へらるゝならば、また同樣に四ムジュールの玉蜀黍に對して五ブラスの薪が與へられ、從つて此の個々の交換に於いて、四ムジュールの玉蜀黍は五ブラスの薪に等價である。故に此の二物は相等しき「交換價値」を有する。

猶ほ止つて自由なる交換の必要々件たる均等性を有する交換價値が嚴格に如何なるものであるかを觀よう。この場合依然として單純な假定より離れまい。こゝでは二契約者と交換の二對象物とを考察しさへすればよい。交換價値は確かに「尊重價値」、換言すれば兩者の各自が別々に欲望の二對象物に附與してゐた利益ではない。――利益は此の二物の所有を比較し、他を取得するために一の幾何讓渡す可きであつたかを決定するものであるが――何となれば利益の比較の結果は二契約者の精神内で不平等であるかも知れなかつたから。先に「尊重價値」なる名を與へた此の最初の價値は、各人が自己の中で相戰ふ二利益間で夫々の側で行ふ比較により形成される。其は別々に考へられた各自の精神内にのみ存在するのである。之に反して「交換價値」はその均等性を認識し、之を以つて交換要件となす二契約者によつて認められたものである。「尊重價値」の決定に於ては、各人は別々に二利益即ち所持してゐるものと所持せんとする物に附與する二利益を比較したに過ぎぬ。「交換價値」の決定に於ては、比較を行ふ人間が二人と、比較される利益が四つある。二人の契約者の各自の個々の二利益が先づこれらの間で別々に比較され、次いで此の二結果が共に比較され、否寧ろ相爭はれて「平均的評價々値」を形成するに至る。之が精確に「交換價値」となり、之に「評價々値」なる名を與ふ可きであると信ずる。何故なら、それは價格即ち交換の條件を決定するから。

今述べたところによつて、評價々値――交換さるゝ二物間で相等しい價値――は本質的には「尊重價値」と同性質のものであることがわかる。それは後者と唯だ平均的尊重價値なるが故にのみ差異あるに過ぎぬ。契約者の各々にとつて與へられたる物の尊重價値は受取られたる物のそれよりもより大で、此の差異は正確に双方に於いて相等しいと述べた。此の差額の半分を取つて最强の價値より除き、最弱の價値に之を附加すれば、兩者は等しからしめらるゝであらう。此の完全なる均等性が正確に交換の評價々値の特質であることを觀た。故に此の「評價々値」は明らかに二契約者が各對象に附與する價値間の平均的尊重價値以外の何物でもない。

孤立人にとつて對象物の「尊重價値」は人間が此の對象の探求に充當し得ぬ能力部分と、彼れの能力總量間の比例以外の何物でもないことは先に論證した。故に二人間の交換に於ける「評價々値」は交換される對象の各々の探究に充當せんと覺悟するであらう夫々の能力部分の總量と二人の能力總量との比例である。

我が兩人間への交換の導入は相互の富を增加すること、即ち同一能力を以つてより多量の享樂量を彼等に與へることを、ここで觀察しておくのは有益である。我が野蠻人の例に於いて、玉蜀黍を產出する海邊と薪を產出するそれとが相互に距つてゐると想定する。若し野蠻人が孤立だつたなら、玉蜀黍と毛皮の貯を得るために二回の往來を余儀なくされるであらう。從つて舟行に多くの時間と疲勞とを損ふであらう。之に反して若し二人ならば、一人は薪の筏採のために、他は玉蜀黍の蒐集のために第二回目に費すべき時間と勞働とを使用するであらう。蒐集された玉蜀黍と薪との總量はより大となり、從つて各自の持分も大となるであらう。

本題に立ち戻らう。「評價々値」は交換せられたる二物件或は價格と賣られたる物件との關係ではないと云ふこと

が先の定義から歸結論される。然しこの誤りは若干の人々が考へ勝ちである。此の表現は絶對的に交換の二條件たる兩價値の比較と云ふ點で正當性を缺くであらう。均等の關係が存在し、此の均等關係は既に相等しき二物を想定してゐる。ところが此の等しき二物は交換せらるゝ二物ではなくして、當に交換せらるゝ二物の價値である。此の故に均等關係を有する諸價値と、比較された二價値を想定する均等關係とを混同してはならぬ。

疑もなく諸價値は比例なりと云ふ意味が存し、之を先に「尊重價値」の性質を究めた場合に説明した。吾々は此の比例は他のあらゆる比と同樣に、分數で表明され得ると述べさへした。交換の本質的要素をなすものは嚴格に二分數の均等であり、兩「尊重價値」間の差額の半分に「評價々値」を確定することにより得られる。

商業の用語で屢々何の不便もなく價値と「價格」とが混同されてゐる。實際上價格の表明は常に價値の表明を含むが故である。然し之は異れる觀念であつて、兩者を區別することが必要である。「價格」とは他物と交換する時與へるものを云ふ。此の定義から此の他物も亦最初のものゝ價格たることは明かである。交換に就いて語られる時、かかることを指摘するのは無默であり、而して商業は總て交換なるが故に、此の言葉(價格)は相互に等しく價格であるところの取引せらるゝ諸物に常に交互的に相應すること明かである。購買されたる物件の價格、或は云つて見れば、二價格は等價値を有してゐる。價格は購入物に値し、購入物は價格に値するが、價値なる名は嚴密に云へば交換の二名辭中他よりも一により適合してゐるものでない。然らば何故に相互に對して此の二名辭が使用されるのか。その理由は以下の通りであるが、而も此の説明は吾人をして價値理論に於いて更に一歩を進ましめるであらう。

此の理由といふのは、價値はそれ自身では表明出來ないと云ふことである。價値の本質に就き先に述べ且つ論證したところを少し省察すれば、容易にこのことは納得せられる。

實際にその第一の名辭即ち分母たる基本單位が評價し得さるものであり、且つ最も漠然たる態樣に於いてしか知られざる比の表現は如何にして發見されるか。一對象物の「價値」が人間能力中の百分の二に相應すると如何にして云はれ得るか、又如何なる能力に就いて語られるであらうか。確かに此の能力の算定には時間の考慮を參加せしめねばならぬが、如何なる期間を定めるのか。人生全部又は一年又は一ケ月、將又一日が取られるであらうか。疑もなくこの孰れでもない。蓋し欲望の各對象物に關聯して人間の能力は、之を取得するために長短ある期間中必ず使用されねばならず、且つその期間の不等は著しいから。人間の各種の欲望により同時に經過する時、而も各種の欲望に關して不等な期間に對してのみ計算に算入せしむ可き時間の長さを如何にして評價するか。常に一個で若し言ひ表はし得るとすれば、分割し得ざる線上を經過する期間に於いて、想像上の諸部分を如何に詳價するか。而して未確定な全要素を含む計算の同じ迷路に於いて、如何なる糸が導き得るであらうか。かくて價値はそれ自身では表明し得ず、此の點で人間の言語が表明し得るところは、一物の「價値」は他物の「價値」に等しと云ふのみである。二人によつて評價せられ或はむしろ感ぜられた利益は、欲望する各々の物と全體の能力とを比較するために、人間の能力を總計することを考へることなく、個々の各場合で方程式を設定する。利益は常に此の比較の結果を決定するが、之はかゝる事を行はなかつたし又なし得なかつた。

故に價値を表明する唯一の手段は、既述の如く、價値に於いて一物が他物に等しと表明するにある。或は猶ほ云つてみれば、一の價値を求めらるゝ價値に等しとして表現するにある。價値は「擴がり」と同樣に價値以外に尺度はない。長短は之を長さに差當てゝ測定すると同じく、價値は之を價値に比較することにより測定せられる。自然より與へらるゝ「基本的單位」は存在せず、恣意的「慣習的單位」のみが存在する。總ての交換に於いて等しき二價値が

あり、他を表示するにより一物の尺度が與へられ得るが故に此の尺度の基本として、或は云つて見れば價値比較の尺度が構成される諸部分の計算の要素として看做さるゝところの恣意的單位の存在を是認せねばならぬ。交換の兩契約者中に一が自己の獲得したる物の價値を表明せんとすると想定しよう。

彼れの與へる物の不變的部分を價値の尺度の單位と看做し、その受くる物の一定量に對して與へる物の量を數量或は單位の分數で表明するであらう。これより次の事が知られる。即ち此の數量は彼れにとつて受くる物の價値を表すであらうし、又その價格とならう。かくて取得者により價値を表明することは、取得せられたる物の價格を云ふことであると考へられる。取得するために與へる物の數量を表明する時、此の數量がその購へる物の「價値」であり、且つ「價格」であると彼れは無差別に云ふであらう。二つの言ひ方を用ふる時、彼れの精神に同一の意味を與へ、之を聞く者の精神に同一の意味を生ぜしむるであらう。これ「價値」及び「價格」の二語は本質的に異れる觀念を表はしてゐるにせよ、嚴密な正確さが求められざる時は、普通の用語では何の不便もなく相互に代用せられ得る所以である。

兩契約者中の一人が自らが與へるものゝ恣意的な若干量を取得する物の價値を測定するものと看做したならば、他の者の方でも、今度は同一の權利を以てその相手により取得され且つ自分自身が與へたる物を取上げて先に相手方が自分に與へ、彼れにとつて役立つた物の價値を測定するであらう。吾々の例では、五プラスの薪に對して四ムジュールの玉蜀黍を與へたる者は、彼の尺度の單位として一ムジュールの玉蜀黍を取り、一プラスの薪は五分の四の玉蜀黍に値すると云ふであらう。かゝる運算は相互に比較せんとする二人間に、例へば一は佛國のオーヌをスペインのヴールで他はスペインのヴールを佛國のヴールで評價する場合に起る運算と同じである。

二つの場合に於いて、一定且つ不可分の單位に對して評價す可き物を取上げ、既に單位として恣意的に取られたことのある一部分を評價するために使用した物の一部分に之を比較して評價する。然しスペインのヴールはフランスのオーヌがスペインのヴールの尺度である以上に佛國のオーヌの尺度でないと丁度同じ意味で、一袋の玉蜀黍は一プラスの薪の價値を測定せぬ。

此の一般的命題よりして、「あらゆる交換に於いて交換の二名辭は相共に他の名辭の尺度である」と推論され得る。同樣の理由で「總ての交換に於いて二名辭は共に相互の代表的擔保である」、即ち玉蜀黍を持つ者は此の玉蜀黍を以て等價の一定量の薪を得可く、同樣に薪の所有者は此の薪を以て一定量の等價の玉蜀黍を取得し得可きである。

之は價値貨幣商業の理論で、非常に簡單ではあるが、極めて基本的なものである。その理論は自明のことであるが、猶ほ屢〻非常に賢明な人によつてさへ誤解され、最も直接的な結果に就いての無智は、屢々施政を最も不幸な誤謬に陷らしめた。例のロー（Law）の組織を引用すれば充分である。

吾々は孤立人及び二人が二物を交換すると云ふ最初の諸假定に甚だ長く止つた。これより價値理論につきこれ以上何等の錯雜をも必要とせぬほどの全觀念を推論せんと欲した。かくて常に可及的單純な假定に身を置くことにより、吾々が、之より歸結せしめんとする觀念は、必然的に精神により明晰明快な態樣で現れるのである。

商業の生成を觀察し「價値ある」と云ふ語に附着する一聯の觀念を完了するためには、最早吾が想定を擴張しさへすればよい。即ち交換者と交換物との數を增加しさへすればよい。

此の後の目的のために常に交換の二物のみを考察しつゝ人間を增加すれば、吾々には充分であらう。

二人の代り四人即ち薪の二所有者と玉蜀黍の二所有者とを想定すれば、四人間に聯絡なく二交換者が夫々の側で

遭遇すると先づ想像される。その時二交換者が世界で單獨であるかの如く各交換は別々に行はれるであらう。然し二交換が別々に行はれると云ふことのみではそれが同一條件で行はれると云ふ可き何等の理由もない。別々に行はれる各交換に於いて、交換される二對象物の「評價々値」は夫々の側では相等しい。然し此の「評價々値」は二契約者が交換物に附與した二「尊重價値」の平均の結果に外ならぬことを見落してはならぬ。ところで此の平均の結果は別々に締結された二交換に於いて全く異つてゐることは極めてあり得ることである。蓋し尊重價値は各自が欲望する對象物を考慮する態樣と他の欲望間に於いて該欲望に指定する効用の秩序に依存するから。其は各個人にとつて相異れるものである。そこでもし、一方に於ける二人の個人と他方に於ける二人の個人とのみを考へるならば、その平均の結果は極めて異なることがあり得る。一の交換の契約者は他の契約者程寒さに鋭敏でないと云ふことは極めてあり得ることで、此の事情は彼等をして薪により少き評價を與へ、小麥により多くの評價を附與せしむるに充分である。かくて二交換の一に於いて四袋の玉蜀黍と五ブラスの薪とが等しき「評價々値」を二人の他の契約者に對して有するに反し、五ブラスの薪は他の兩契約者には、二袋の玉蜀黍に等價であるに過ぎぬかも知れぬであらう。此の事は各契約に於いて二對象物の價値は精密に等しいことを妨げぬであらう。蓋し一を與ふるに對して他を受けるからである。

今四人を近づかしめ、且つ聯絡を有し、或は薪或は玉蜀黍の所有者の各々による申出條件を相互に知ることが出來ると想定すれば、その時より五ブラスの薪に對して四袋の玉蜀黍を與へるに同意してゐたものが、單に二袋の玉蜀黍に對して五ブラスの薪を與へるに同意するのを知る時に最早かく爲さんとは欲せぬであらう。

然し同量の薪五ブラスに對して四袋の玉蜀黍を取得し得ることを知つた時は、後者も亦考を變へ、最早二袋で滿足せぬであらう。然し玉蜀黍の所有者は薪の所有者が二袋で滿足して同意する以上に之を與へることを諾さぬであらう。かくて目論まれた交換條件は變化せられ、薪の價値と玉蜀黍の價値とに就いての新しき評價が形成せられるであらう。此の評價は兩交換に於いて四契約者にとり同一となるであらうこと、即ち同量の薪に對してはより多くもより少くも與へぬであらうし、相互に薪の所有者は同量の玉蜀黍に對してより多くもより少くも與へぬであらうことは先づ明かである。一見して判る通り、玉蜀黍の所有者の一人が同量の玉蜀黍に對して他よりも少き薪を要求するならば、薪の二人の所有者は此の値下を利す可く彼れに買入を申出づるであらう。此の競爭が此の所有者をして同量の玉蜀黍に對して前に要求した以上を要求せしむるであらう。他の玉蜀黍の所有者は、今度は必要とせる薪の所有者を自らに引戻すために、玉蜀黍の提供を高めるであらう。此の作用は玉蜀黍の二所有者が同量の薪に對して同量の玉蜀黍を提供するところまで起るであらう。